

研究論文

宝塚市立小学校校歌の中の山と川について

— 環境教育学習材の視点から —

古岡俊之

The Mountains and Rivers in Takarazuka Municipal Elementary School Songs

— From the Perspectives in Environmental Education Learning Materials —

FURUOKA Toshiyuki

## 要 旨

2017年告示の改訂学習指導要領は「資質・能力」の育成を目指すものである。小学校校歌詞の比較で思考力や判断力、表現力の育成のためには追究の視点（位置、場所、人間と自然との相互依存関係、空間的相互依存関係、地域）を生かした問いが重要である。どこに？（位置）、どのように？（分布）など分布の規則性や傾向性を読み取る活動を通して、事象や場所の一般性や共通性、地域差を見いだす。またどのような？（場所）と、場所の自然的条件や社会的条件を明らかにし、場所や地域についての事実認識をもつ。そして、なぜ？と地域という枠組みの中で、多面的・多角的に考察することが求められる。最後にどうなるか？どうすべきか？（地域）、その地域は将来どのような姿になっているべきか、そのために私たちはどう行動すべきなのか、特に地域環境の将来像を公正に選択・判断する力を養うことが大切である。

**キーワード：**新しい学習指導要領、小学校校歌、自然、地域環境、地理学的景観

## Abstract

The revised curriculum guidelines 2017 aim to nurture “qualities and abilities.” In analyzing elementary school song lyrics for developing critical thinking, judgment, and expressive skills, it is essential to incorporate investigative perspectives such as position, place, interdependence between humans and nature, spatial relationships, and regional aspects. Activities that involve reading the regularities and trends in distribution—answering questions like where? (position) and how? (distribution)—play a vital role in discovering events and places’ generality, commonality, and regional distinctions.

Moreover, understanding what? (place) and elucidating a place’s natural and social conditions contribute to developing a factual awareness of places and regions. A comprehensive examination is required within the framework of “why?” in the context of an area, considering multiple facets. Lastly, addressing “what will happen?”, “what should be done? (region)” involves contemplating the future shape of that region and determining our actions accordingly. Cultivating the ability to choose and judge the future image of the regional environment impartially is particularly crucial.

**Keywords:** new curriculum guidelines, elementary school song, nature, local environment, geographical landscape

## 1 はじめに

作曲家古関裕而氏の人生を描いた物語である NHK 連続テレビ小説「エール」は、2020年度前期に放送された。彼は早稲田大学の応援歌はじめ1000校以上の校歌にその名を留めているという。校歌は、その学校の校風を発揚するために、学校にとっては重要な教材で、入学式、運動会・体育会、卒業式などの主な行事には、欠かすことのできない歌である。そのため、校歌の制定には、各学校ともきわめて慎重に臨んでいる。また、校歌は在学時代を通して、最も多く歌われる歌であることから、全校の児童生徒が校歌の歌詞を暗唱しているほどである。あるいは母校を卒業してからも、在学時代を懐かしみ、母校の校歌を、誰しも口ずさむことがあるものである<sup>1)</sup>。校歌には、次世代を担う子どもたちのアイデンティティー形成に効果があるとされている。校歌には多く地域環境が歌われるが、地域環境の保全が求められている今日においては、校歌とそれが果たす役割は大きい。

## 2 先行研究

校歌に関する研究は様々な分野でなされている。教育学、音楽学、建築学などでも校歌を対象とした研究がある。地理学では、朝倉隆太郎による全国の中学校校歌の研究に代表されるように、山々など校歌に歌われる自然要素の地理的分布と学校との位置関係が検討されてきた<sup>1)</sup>。ただし、地理学教材としての価値については言及がない。最近になって、須藤洋次が京都の景観について分析し、地域理解のみならず、持続可能な開発のための教育（ESD）のねらいから態度形成を含めた教育実践の提案をしている<sup>2)</sup>。また、筆者が兵庫県南部に位置する西宮市83学校園の校歌によまれている自然環境、人文環境などを分析して、環境学習教材としての可能性について論じたものがある。教育目標、校訓、期待する教育像など教育理念がそこに織り込まれていることがわかる<sup>3)</sup>。

本稿では、兵庫県宝塚市（以後宝塚市と称する）内にある公立小学校・養護学校（以下小学校という）のうちホームページで紹介されている全24校の校歌詞を研究対象とする。これらの学校の校歌詞によまれているところの、自然環境、人文環境などを分析して、宝塚市の地域環境の特色の解明を試み環境学習素材としての可能性について論じることとする。

宝塚市では、どの山や川が小学校校歌詞の中に歌い込まれているのだろうか。また、その範囲はどの程度の広がりにあるのだろうか。山や川以外にも歌詞にみられる文化財等にも触れ、その意味を明らかにしていくのも意義あることと思うが、ここでは山と川に限定して考えてみたい。

※この論文では、環境教育・環境学習という用語を主として以下のように用いている。

環境教育……学校や指導者などにおける意図的・計画的な環境に関する指導

環境学習……学習者の主体的な学びを意識した環境に関する学習

### 3 研究の目的

本研究は、地理学からの校歌研究として、宝塚市の小学校の校歌詞を取り上げ、地域環境と校歌詞との関係を考えてみたい。歌詞の内容整理・分析をしてみると、その学校が（１）所在している地域の環境、（２）目標としている教育目標、校訓、期待する教育像など教育理念が織り込まれていることがわかる。

本稿では、学校を取り巻く山、川、海などの地形環境と、気候・風土、さらに動物、植物などを含めた自然環境、また、その学校に深い関係のある産業や史跡などの人文環境から分析するが、今回は山と川を例にして宝塚市の地域環境を、2017年度改訂の学習指導要領の趣旨を踏まえた小学校における環境学習（社会科・総合的な学習の時間）教材の可能性について考察する。

### 4 研究方法

研究資料としては、兵庫県教育委員会こども教育課のホームページより兵庫県学校を検索し、各市町の教育委員会が掲載するホームページにて公開している各学校情報を用いた。

24の小学校校歌詞を対象とした。

校歌詞を分析する項目の選定については、宝塚市立長尾小学校、同市立西谷小学校、同市立西山小学校等の校歌をサンプルにして分析した結果、次のような9項目を選び出した。

①山、②河川、③平野、④海洋、⑤気候、⑥動植物、⑦史跡、⑧産業、⑨太陽等校歌を分析した結果を、項目ごとにプロットして、その分布の地域的差異などを考察した。このように項目ごとに地図化してみると、地域の特色を明瞭に把握することができた。

### 5 わが国における環境教育の推進に向けての取組

わが国では、1998年に幼稚園教育要領や小学校学習指導要領が改訂され、学校教育に正式に位置づけられるようになった。そして、1992年に文部省は、「環境教育指導資料（小学校編）」を、次いで1995年、事例集を作成し、学校教育での環境教育を推進させるための施策を打ち出した。1996年には、中央教育審議会第一次答申において「環境問題と教育」の章が設けられ、環境教育の必要性和重要性について、①環境から学ぶ ②環境について学ぶ ③環境のために学ぶ、の3つが示された。

2014年10月、国（国立教育政策研究所教育課程研究センター）は、先の「環境教育指導資料（小学校編）」を改訂し小学校環境教育のねらいを次の三点とした。

#### ①環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的に関わり、環境に対する豊かな感受性をもつことができる。

#### ②環境に関する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく

問題解決の能力と、その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関する見方や考え方を育むようにする。

### ③環境に働きかける実践力の育成

持続可能な社会の構築に向けて、自ら責任ある行動を取り、協力して問題を解決していく実践力を培うようにする。

その後もわが国の環境教育の推進等については、「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律の一部を改正する法律」の公布・施行や、国連「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」の動き、学習指導要領改訂による環境教育に関する学習内容についての一層の充実など、様々な施策及び取組がなされてきている。

## 6 宝塚市の概要

### 6-1 地理的・自然的特性等

兵庫県東部に位置する宝塚市は、阪神間を代表する都市の1つである。地形等によって4つに区分できる。まず第1は、丘陵上の北摂山地を主とする北部地域（西谷地区）である。人々の生活空間は、細長く伸びた盆地部分に展開する。第2は、北部と南部を分けている長尾山である。標高は400～500mにすぎないが、人々の交流の妨げとなるその障壁性は完全に克服されているとはいえず、南向き斜面に宅地、ゴルフ場などの開発の手が伸びている他は、ほとんど生活の舞台にはなっていない。第3は、南部の平野部である。大阪平野の北西端を占め、武庫川の形成した沖積平野と河岸段丘からなる。主要な官公庁や宝塚温泉があり、最も活発な活動の舞台となっている。第4は、南西部の六甲山地東麓の台地・丘陵部で、大正から昭和にかけて宅地化される以前は、入会地として採草などに利用されるに過ぎなかった地域である。

以上4つの地域のうち、第1、第2の地域が、ほぼ旧西谷村に相当し、面積的には市域の3分の2を占めるが、人口では50分の1に過ぎない農業地域である。また第3、第4の地域は、旧長尾村、宝塚町、良元村に相当し、住宅都市あるいは観光都市として、近年著しい人口増加を見せている地域である。このように本市は、域内に対照的な性格をもった地域からなっている点で、兵庫県の縮図ともいえる<sup>4)</sup>。

### 6-2 歴 史

南部の平野部は、大阪平野の北西端をなし、しかも武庫川の谷口にも当たるという位置から考えても、かなり古くから人々の生活の舞台となっていたであろうと想像される。

また、北部地域も、山間ではありながら、猪名川流域や三田盆地への交通は容易で、かなり古くから人々の出入りがあったことは、1971年（昭和46年）に西谷中学校付近で発見された古丹波の壺7個と19万枚の銅銭（室町時代以降）が物語っている。

しかし基本的には農村地域という性格を保ちながら長い歴史を歩んできた。大阪と有馬温泉・丹波地方を結ぶ街道沿いに宿駅が発生したが、それらは封建都市の段階までに成長するには至らなかった。したがって、歴史の表舞台に宝塚の名が登場してくるのは、明治末期以降で



第1図 宝塚市立小学校位置図

(宝塚市小学校3・4年生社会科副読本掲載図に筆者作図)

ある。1884年、武庫川右岸で温泉が発見され、1887年に宝塚温泉が開業した。1897年には阪鶴鉄道（現在のJR宝塚線）が開通した。

1914年（大正3年）4月、小林一三の主宰する宝塚少女歌劇の幕が開き、以後、この新しい芸術活動は幾多の曲折を経て、現在の宝塚歌劇へと成長した。同時に小林一三自身が〈武庫川河畔の一農村（『宝塚漫筆』1965年）〉と表現した宝塚が、わが国を代表する観光・レクリエーション都市へと変貌していった。また、無理にこしらえた都会である（『宝塚漫筆』）という特殊な歴史を持つ市ともいえる。

一方、大都市近郊に位置する住宅衛星都市という性格も有する。宝塚駅を起点とした場合、大阪・梅田へは阪急電鉄宝塚線ならびにJRの福知山線を利用すれば30数分、また、神戸・三

宮へも阪急今津線および神戸線を利用すればほぼ同じ所要時間である。

このような地の利を生かした宅地開発は、古くは大正中期の別荘地開発にその端緒を見いだしうが、本格化したのは昭和30年代後半からである。このことは人口の推移からも明らかである。社会増加率が高かったのは1965年（昭和40年）以降の10年間で、年平均増加率50.0%の高率を示し、自然増加率は1970年（同45年）以降の10年間で16.5%の高率となっている。比較的若い世代が多く本市に転入し、その後の出生率の上昇で総人口の増加がもたらされたことを意味している。

都市化に伴う南部地区のこのような変化と呼応するように、長尾山北側の西谷地区にも顕著な変化がみられる。農家数は減少し、残っている農家の多くが第2種兼業農家である。このような状況下で、都市計画法の市街化調整区域に指定された西谷地区では、農地の宅地化が最小限に食い止められ、豊かな自然環境がよく保持されており、全戸数のうち何戸かは農業を営んでいる。最近では地の利を生かして、観光農業へと著しい変貌を見せている。具体的にはアイリス、ダリアなどの花つみ園、イチゴ狩り、マツタケ狩りなどである。

現在、市では「北部地域土地利用計画」を策定し、西谷の豊かな自然環境を保全しつつ、定住人口の維持・交流人口の増加による西谷の活性化に向けたまちづくりを進めており、農家レストランや物販店舗などの開設にあたり、その手続きなどを定めた「宝塚市北部地域振興に資する施設の建築等に関する要綱」を策定した。

### 6-3 文 化

また一方、古くから歌劇・温泉の町として知られているが、市立手塚治虫記念館、日本有数の植木産地や、中山寺・清荒神などの神社仏閣、畿内文化の幾多の遺跡にも恵まれ、園芸・観光・レクリエーション都市としての性格も有している。

## 7 校歌に見られる地域の風景を表す表現

宝塚大劇場に近い宝塚市立末広小学校の校歌詞をみると、「清い流れの 武庫川に 臨んで たてる わが校舎…」(1番)「六甲の連峰 晴れわたり あおぐ瞳の かがやいて…」(2番)というように阪神地域、宝塚地域を代表する六甲山、武庫川が校歌にうたわれている。これは阪神地域、宝塚地域のシンボリック風景の一つと考えられる。このことから地域を代表するシンボリック風景について、宝塚市ではどのような表現が校歌詞にうたわれているかと分析してみた。これらの校歌詞から山地、河川など環境要素に準じた言葉を抽出し、その割合を環境要素別に表してみると(表1)のようになる。

表1 環境要素別校歌詞の数の割合(宝塚市地域)

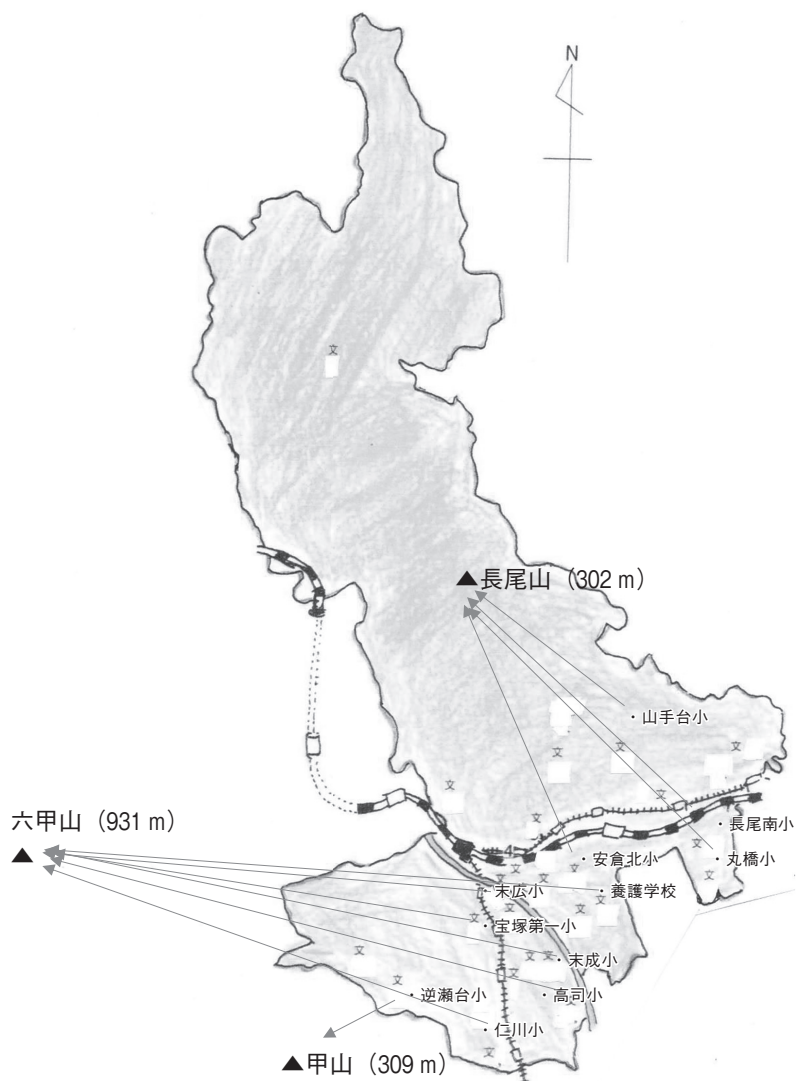
N = 103	環境要素別校歌詞数の割合 (%)								
	山地	河川	平野	海洋	気候	動植物	史跡	産業	太陽等
%	21.3	12.6	0.9	4.0	9.7	29.1	0.9	13.6	7.8
歌詞数	22	13	1	4	10	30	1	14	8



## 8 宝塚市の小学校校歌詞にうたわれている山地と特徴

宝塚市立の各小学校がどの山を校歌の歌詞に取り上げているか主なものを例示する（第2図）。最も多くの校歌歌詞に取り上げられているのは六甲山（6校）で群を抜いている。それに次ぐのが長尾山（4校）である。それ以外に、なだの山、かさなる山、みどり色濃き山、山々緑に、野に山に、あおぎみる山（各1校）などの表現で、どの山を指してのことか特定してはいないが、ある。現地の山の景観の及ぼす教育的な影響について確認したい。

これらの山地のうち六甲山、長尾山について校歌歌詞の例、山地の特色を述べる。



第2図 宝塚市立小学校校歌にうたわれたおもな山

（宝塚市小学校3・4年生社会科副読本掲載図に筆者作図）



## 8-1 六甲山 (931 m)

[校数] 6校 (宝塚第一小、仁川小、末成小、末広小、高司小、養護学校の各小学校)

### 【校歌詞】

- 2 仰げば六甲の 山高く 涯なき空に 吹き通う  
風も爽けき 庭の子は 強く明るく 雄々しかれ (宝塚市立第一小学校)
  
- 1 六甲の丘 緑こき 木々の若芽の ひかりこそ  
われらの心 すこやかに のびよ 仁川の子ら高く (宝塚市立仁川小学校)
  
- 1 晴れわたる六甲の山脈 あおぎみて ともに手を取り  
わが友と清く正しく ひとすじに磨きいくわれら  
この心 ああ末成よ はげむ末成わが母校 (宝塚市立末成小学校)
  
- 2 六甲の連峰 晴れわたり あおぐ瞳の かがやいて  
希望を胸に ひたすらに 鍛えに鍛え 進みいく (宝塚市立末広小学校)
  
- 3 六甲山よ 武庫川よ かわらぬ千代の姿あり  
良い子をめざし 歩みゆく 夢よふくらめ高司 (宝塚市立高司小学校)
  
- 3 さあ おそれず とぼう あの おおぞらを  
ちから いっぱい はばたいて  
ろっこうさんの むこうまで  
みんなで とぼう あの おおぞらを (宝塚市立養護学校)

六甲山は、六甲連山または六甲山地と呼ばれる連峰中の最高地点をいう。標高 931 m。連峰全体からの位置はやや東寄りに当たる。地名は古代、難波の向こうにそびえる山であるというところから務古の山と称され、神功皇后が戦勝記念に鎧甲を埋めたために武庫の山となった。のち六甲の山となり、「ろっこうさん」と変わったといわれる。

六甲山地は、非常に長期間にわたって働いた東西方向の圧縮力の下、地下の花崗岩が徐々に押し上げられて作られた。その際、山地の東方で高く、西の方で低い形に傾き上がった。すなわち傾動隆起してできあがった山が六甲山である。

その押し上げに伴って、岩石中にたくさんの割れ目ができる。その大きな割れ目が断層である。六甲山は地史的には非常に新しい山なので、当然、その山を作るのに関係した断層も新しく、阪神淡路大震災で有名になった活断層が非常に多い。西端は須磨、塩屋の岸から東は武庫川右岸に至っている。東西約 30 km、南北約 10 km にわたる。花崗岩を主とし、石英粗面岩、古生層、第三紀その他の地塊から成る山地で瀬戸内海国立公園に属している。山頂部の隆起準平面上は、その高さ、平坦さを利用したホテルや保養所、ゴルフ場、人工スキー場等がある。

六甲山地は傾斜がきつく、岩倉山・譲葉山・岩原山・行者山が連なっている。このうちの岩原山が標高 573 m で市内最高峰である。山地の大部分は、花崗岩からなっている。花崗岩は、地下深くでマグマがゆっくり冷え固まって形成された。

## 8-2 長尾山 (302 m)

[校数] 4 校 (長尾南小、丸橋小、安倉北小、山手台小の各小学校)

### 【校歌詞】

- 1 長尾の山に こだます 小鳥の歌を ききながら  
みんなのびのび まなぼうよ たのしい 長尾南小学校 (宝塚市立長尾南小学校)
- 2 長尾連山 北に見て 光と風に 希望あり  
われら ここに 集いきて 道を求めて 学び行く  
その名も 高し 丸橋小学校 (宝塚市立丸橋小学校)
- 1 長尾の峰や 武庫川が 元気に伸びようと 歌ってる  
ひとりひとりが一歩ずつ 力あわせて あるくんだ  
みんなの安倉 北小の 明日に続く 今日の道 (宝塚市立安倉北小学校)
- 1 緑なす 長尾の山に こだます  
われらの歌声も 高らかに 共に歩もう 希望の道を  
元気いっぱい ふみしめて 大きく伸びる山手台 (宝塚市立山手台小学校)

宝塚市域北部の約 6 割を占めている長尾山地は、標高 300～500 m の峰が連なっている。長尾山地の大半は有馬層群からなる。有馬層群は大規模な火山噴火によって形成された地層で、活発な火山活動の影響で周辺に鉱脈鉱床を形成した。宝塚市北部から川西市、猪名川町一帯に広がる多田銅銀山は、有馬層群の火山活動に伴って形成されたと考えられている。宝塚市北部の猪名川町酒井付近に、千本・駒宇佐・小幡などの坑道があり、かつて銀や銅などの鉱石を産出したが、現在はいずれも閉山している。また、長尾山地には、火山岩の流紋岩が見られる。すみれガ丘・御殿山周辺にはかつて採石場があり、流紋岩が採取されていた。川面字長尾山には現在も大規模な採石場がある。

## 8-3 甲山 (309 m)

[校数] 1 校 (逆瀬台小)

### 【校歌詞】

- 1 ゆずり葉のうた きこゆ かのおかへ 手をとって 行こう ころひらいて  
かぶとやま あおく くさも木も もえたつ かのおかへ  
ふかみどりの ゆずり葉たちのうたう かのおかへ (宝塚市立逆瀬台小学校)

六甲山地の東の端にある北山山塊（平均高度 200 m）の真ん中に、お椀を伏せたような形で突き出した甲山（標高 309.4 m）は古くから人に親しまれている山である。

甲山（火山）は、1200 万年前にできたようだ。それが長い長い年月の間に雨や風が火山（甲山）の上の部分を削り取り崩していった。300 万年ほど前から、土地が沈みはじめ、海の表面より低くなったようだ。30 万年ほど前からまた、土地が隆起しはじめ今の高さになったようだ。その後も海水面が 100 m 近くも下がったり（氷期）、地球が暖かくなって、海水面が甲山の麓まで上がったりしながら今のような海水面になった。

#### 8-4 まとめ

山は、理想として掲げるにふさわしい目立って大きな峰が取り上げられ、校歌にも謳い込まれている。すなわち、宝塚市南西部に位置する小学校では、代表する山として六甲山をあげていると思われる。また、宝塚市中南部すなわち長尾山周辺に位置する小学校では長尾山がそれぞれ代表する山と考えられている様子がうかがわれる。

### 9 山の自然を守る

山は、第一に、そこに住む人々にとっての生活の場として重要である。さらに、遠く離れた都市に住む人々にとっても、水源地としての重要性を渇水のたびに認識させられる。そんな山・森林の持つ保水能力を人はダムや発電所を作ったり、涵養林を育てたりして活用してきた。人は流れ出た水を飲料水や電力にしたり、田畑を潤す水にしたりして豊かな生活と安定した実りを得てきた。

しかし、乱開発によってその能力を失ってしまっているという現実の問題もある。木々が伐採された山々では、大きな水害が人々の生活を襲うことになるのである。人が山・森に対してなしてきた行為が、子供の生活に様々な波紋を投げかける。山・森に浸り、山・森を感じることで、子供たちは様々な山・森の姿に気付くことであろう。山の自然を守るためには、山の自然そのものをもっと知らなければならない。

山にかかわる活動を通して、子供たちは目の前にある一本の木から 3 億 5000 万年の地球の歴史や、今の開発の姿を、また、一枚の葉っぱからの光合成や、川の流域の広がりを思い描いていく。そして、山・森と共に生きていくこれからの自分の姿を考えていく。

このような環境問題を認識するために学校では、まず身近な問題から取り上げて、興味・関心をもたせることが重要である。児童の発達に応じて、それが地球規模の問題につながっていることや地域的な広がりをもつようになっていることを認識させるとともに、それらの問題が相互に深く関わっていることを理解させるなど、多層な環境問題を総合的に把握するのを感じ、それを捉えさせることが大切である。校歌詞にみる山、川はそのきっかけとなるに違いない。このあたりが、現在、学校教育に課せられた問題であり、最近、総合的、全体的、関連的にとらえる方法が取り入れられているゆえんである。

## 10 宝塚市立小学校校歌詞にうたわれている川と特徴

次に宝塚市立各小学校の校歌の詞に、どの川がうたわれているかを図示する（第3図）。

最も多くの校歌に取り上げられているのは武庫川（10校）である。これに次ぐのが逆瀬川だが1校と少ない。これらの河川について校歌歌詞の例、河川の特徴を述べる。

### 10-1 武庫川

〔校数〕10校（良元小、宝塚小、西谷小、仁川小、末成小、美座小、末広小、高司小、安倉北小、すみれガ丘小の各小学校）

武庫川は、武庫川水系の本流であり、全長 65 km、流域面積 496 km をもつ兵庫県下第 6 位の河川であり、武庫平野の形成に大きな役割を果たしてきた。地形面だけでなく、農業用水や飲料水として恩恵を与え、現在では西宮・尼崎・伊丹との市境の役目を果たしている。武庫川は篠山盆地の南方から源を発して流れてくるが、JR 福知山線の道場から武田尾、生瀬にかけて深い峡谷となり、有馬山地と六甲山地を横断する。峡谷部の南端近くで東に向かって流れてきた名塩川をあわせる。

武庫川（武田尾）溪谷は、中流であるが上流のような荒々しい流れと景観を呈するのが特徴である。武庫川溪谷を出ると、宝塚駅付近で武庫川は大阪平野の北西部に流れ出し、一気に穏やかな流れとなる。ここでは山中から運んできた土砂を堆積させ、扇状地を形成してきた。つまり、宝塚駅付近は扇状地の扇の要の位置に当たっている。川幅も広くなり、六甲山地の東面を集水する逆瀬川・仁川が、武庫川の最後の支流である。

武庫川には、大小様々な河川が流れ込んでいる。武庫川右岸に注ぐのは、上流から順に観音谷川、塩谷川、川西川、逆瀬川、仁川など。武庫川左岸に注ぐのは、上流から順に波豆川、川下川、惣川、一後川、荒神川、大堀川、天王寺川などがある。また、波豆川の支流に佐曽利川があり、天王寺川の支川に勅使川、足洗川、天神川などがある。校歌詞の例を示す（表2）。

表2 武庫川に係る校歌詞の例

歌番	武庫川を含む校歌詞	学校名	歌番	武庫川を含む校歌詞	学校名
1 番	武庫の川 松浪はろにかすむほとり	良元小	1 番	武庫の松なみ みどり濃く	美座小
2 番	流れゆくなる 武庫川や	宝塚小	1 番	清い流れの 武庫川に	末広小
2 番	とうとうと大海へ 武庫の水上	西谷小	3 番	六甲山よ 武庫川よ	高司小
2 番	武庫の川水 澄む中に	仁川小	1 番	長尾の峰や 武庫川が	安倉北小
2 番	風そよぐ武庫の川辺に	末成小	3 番	武庫の川波 清らかに	すみれガ丘小

### 10-2 伊子志の渡しと武庫川の橋

明治になるまで市域の武庫川には、橋が架かっていなかった。川を渡るには浅瀬を歩くか、渡しを利用するしかなかった。中山寺から小浜宿を経由して西宮へ向かう道にあった伊子志村には、「船渡し」があった。現在の末広小学校と宝塚中学校のあたりで、当時、川幅 150 m の

武庫川を往復していた。伊予志の渡しは、1919年（大正8年）ごろまで続いていたと伝えられている。

宝来橋は1902年（明治35年）ごろ武庫川に市域で最初に架けられた橋だとされる。この橋は洪水で幾度となく流されて架け替えられ、現在のS字橋が1994年（平成6年）に完成した。

宝塚南口と武庫川町を結ぶ宝塚大橋は、1933年（昭和8年）に完成。自動車が通れる橋としては宝塚初で、当初は宝塚新橋と呼ばれた。現在の宝塚大橋は1978年（昭和53年）に架け替えられたもので、全国初のガーデンブリッジ。歩道の幅が広く、車道との間に植栽帯を設け、彫刻やベンチが設置されている。市役所横の宝塚新大橋は、1960年（同35年）に誕生した。また最も南の武庫川新橋は、1994年（平成6年）に完成した。橋の中央部には、伊丹市との市境がある。

### 10-3 逆瀬川

〔校数〕 1校（西山小学校）

#### 【校歌詞】

2 清らかな 逆瀬の流れ あたたかく 野上の丘に

はぐくまれ 生い立つ若木 手をつなぎ 肩くみあいて

きらめくは われらの命

（宝塚市立西山小学校）

武庫川に流れ込む逆瀬川は、かつては大雨のたびに氾濫し、流域に水害をもたらす暴れ川であった。逆瀬川流域の六甲山地の花崗岩は、本来は固く丈夫だが、活断層の周辺で繰り返し起こった地殻変動で破碎されたことに加え、長年の風や温度差などによって風化し、もろく崩れやすい「真砂土」に変化した。さらに、近世以降は過剰な山林伐採により六甲山地の荒廃が進んだ。このため六甲山地に大雨が降ると、真砂土が水を吸って崩壊し、地滑りや崖崩れ、土石流を引き起こした。

明治から昭和初期、逆瀬川の中流から下流部は川幅が150～200mもあり、大雨のたびに山から運ばれてきた土砂で覆われていた。普段は水流がほとんど見られず、大量の土砂が川を埋め尽くしていたことから「逆瀬川砂漠」と呼ばれるほどであった。また、上流の谷は、ひと雨で千石もの土砂がズリ落ちてくることから「千石ズリ」とも呼ばれていた。

1892年（明治25年）の大水害で深刻な被害が出たのをきっかけに、逆瀬川では上流部の崩壊斜面に階段状の林床をつくり、植林するという山腹工事が行われた。これは六甲山系では初めての砂防工事であった。その後、大正時代にかけて、中流部で谷止工・床固工・堰堤工が整備された。

さらに、1928年（昭和3年）から1934年（同9年）にかけて、白瀬川との合流点から武庫川に至る2kmで本格的な砂防工事が行われた。「砂防の父」と呼ばれた赤木正雄の指導のもと、日本で初めての大規模な玉石積流路工を施工。流路工は川幅18m、延長5.4kmで、当時の石工技術の粋を集めた巨石積堰堤や鎧積堰堤など、日本の近代砂防史を物語る屈指の構造物が施工され、砂防技術の宝庫とされる。砂防工事で流路が安定した逆瀬川流域では、河原だった土





## 11 身近な環境である川

### 11-1 人のくらしと水

“ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中（よのなか）にある人と栖（すみか）と、又かくのごとし”。鎌倉時代に鴨長明が表したこの『方丈記』の冒頭文は、人生の無常を川の流れに例えたものとして有名である。このように日本の河川は、日本人の思想ともかかわりあっている。

ゲンジボタルは、人間がその川にかかわりあう以前から生息していたはずである。彼らは生態系の中で生きていた。それが人間によって文化的環境が拡大され、河川の利用度が高められて行くにしたがい、人間とホタルとの共存の度合いは減少していった。

ホタルを観賞できること、実際に川辺に立って見られること自体、精神面での人間環境として有意義である。本質的には、たとえ都会を流れる川であっても生き物が棲める状態にするよう私たちが英知をしまることの重要性を指摘したい。

今、人間はさらに川を痛めつけている。それは自然の浄化作用を超え、自然の力でも浄化不可能なごみや汚水を流し続けてきたということである。そういった行為が、数多くの公害や環境問題として私たちの生活にも跳ね返ってきている。

### 11-2 みんなで守る「川」の自然

これからの時代を生きる子供たちには、自然界の共生・調和する姿を実感として捉えていくこと、自然を押さえ、思うがまま変えよう利用しようとする人間の姿を見つめていくこと、この両者を考えていくことが必要となるだろう。具体的にその川の名前や流れを思い浮かべられるだけでなく、その瀬や淵のたたずまい、そこにいる魚や水生昆虫の姿が思い浮かべられなければ、改善に向けての行動にはつながらない。いまここで自分が流すものが、あの川のあの魚を殺す、あの水生昆虫を殺すのだと想像できなければ、人は行動に移れない。そうした意味でも、私たちはまず身近な川に行き、そこに生きる、あるいは死にかけている生き物たちの姿を知るべきである。また自然のままの川がどれほど多様性を持った生き物をはぐくんでいるかということ、身をもって知るべきである。住みよい宝塚地域の環境を創造していくには自然条件を総括的に把握して、自然の力をうまく利用した総合的な計画を立てる必要がある。

川の自然を守ることは、川に育てられてきた私たちの文化を守ることであり、また川の自然と共に生きることである。どちらを否定しても、私たちの生き方は貧しくなることだろう。川の自然を守ることは時にわずらわしいが、守ることによって私たちの人生は豊かになるのである<sup>5)</sup>。

## 12 環境教育の教材としての校歌詞

校歌は、メロディと歌詞との組み合わせからなるメディアである。児童生徒は、うたったり聞いたりすることを通して、歌詞にある自然の美しさや、自然が作り出す音など自分なりに感

じたり考えたりしながらイメージ化できるという利点をもっている。

朝倉は、全国の中学校への『校歌に関する調査』結果から、「校歌は、主な行事（入学式、卒業式、始業式・終業式、修了式、運動会、音楽会など）でうたわれることが多い。それは学校や地域への所属感や一体感をはぐくむことにつなげるためである。それらは、在学中児童生徒の心の糧として受け入れられると同時に、将来、心のふるさととしての価値となる。こうして、自分の学校への所属感・連帯感や郷土に対する愛情が養われる。」と述べ、校歌詞は地域性を反映し、環境教育への認識を高める上でも重要な意義を持っていることを明らかにしている。

これは、環境教育がねらう自然の美しさや大切さを感じ求める等の豊かな感受性をもつ人間形成のための素地となるものである。今まで深く考えずにうたっていた校歌が、環境意識を高めるのに役立っていたことになる。

### 13 小学校における環境教育の教材

環境教育に関する教材は、何か特別のものがあるのではなく、従来から日常的に利用している教材を、環境教育という視点から見直して活用していく。一見、環境教育と関係がないと思える教材も、視点を変えてみると教材化できるものがある。

まず、児童を取り巻くすべての環境が、環境教育の教材となり得る。小学校では、児童が身近な環境との直接的な触れあいや関わりを通して、豊かな心や環境意識を育むことを大切にしている。動植物の飼育栽培や観察、大地やそれを取り巻くもの（空気、山地、河川、水、土、石、雨、海、月、太陽、星など）などの自然環境との直接体験がその基本となるものである。小学校における環境教育は、児童一人一人が自分自身の周囲の様々な環境と関わりをもったり、具体的な体験をしたりするところから始まる。児童一人一人が環境に対して、興味・関心をもち、意欲的に関わり環境に対する豊かな感受性を育むことが大切である。

小学校段階の児童は、自らの生活に深く関連した身近な事象や直接体験できる具体的な事象に興味・関心をもち、問題意識を育んでいく。環境保全、自然破壊、生物学的倫理などという言葉はいくら知っていても実行が伴わなければ何の意味もない。これらは究極的にはその人間の生き方にかかわることがらである。まず自然をよく知ることである。生物多様性が減り、砂漠化が進み、地球温暖化などの地球規模の環境問題を直接取り上げるのではなく、まず身のまわりの身近な事物・事象に目を向け、児童自ら問題をとらえ、考えるようにすることが大切である。

また、環境教育の視点から間接教材としての視聴覚教材がある。音楽、絵本、紙芝居、ビデオ、スライドなどの多種多様な教材があるがこれらは直接体験できないことを補うという補助教材としての役割をもつだけでなく直接体験を支える教材としての価値がある。

このように、身近な環境の中での本物の直接体験と、音楽などの中での間接体験との両者をうまく取り入れながら、相乗効果を生み出すような工夫が必要である。

## 14 おわりに

主に宝塚市の公立小学校のHP（2022年）に掲載されている「校歌詞」を利用して、小学校校歌にうたわれている山と川について、特に地理的分布について検討した。この結果、山については六甲山、長尾山のように地域を代表するような周囲から突き出した、目立った山が取り上げられ、取り上げられる山の数が多い。これに対して川は、身近な自然として取り上げられる傾向にあり、したがって小学校に近接した武庫川及びその支流としての逆瀬川がうたわれる。

その事実からもっと校歌を通して、児童の身の回りの環境を意識化させていくことが大切である。今後は、校歌（音楽）という独自のテーマでの環境教育へのアプローチも考えていくとよい。今後の課題としては、さらにそれらの内容を細かく分析し、環境教育の視点から校歌（音楽）を位置づけ、環境学習教材選定のための一資料を作成していくことが望まれる。

最後に、小学校における環境教育は、社会科や理科などの教科や総合的な学習の時間で取り上げる自然保護や環境問題等を優しく小学生向けに解説していくことではない。自然の美しさや神秘さ、環境の変換度に気付かせ、身近な環境への豊かなイメージづくりや共感性、また、自分と自然、自分と他人・社会などとの関係性などをねらいとして位置づけられていくべきであると考え。その意味から、教育者は児童の発達や状況に応じ、校歌（音楽）一つにも環境教育の視点から、独自に教材化していく能力と積極性が求められる。

### [引用・参考文献]

- 1) 朝倉隆太郎『山と校歌—中学校校歌に歌われている山地』、二宮書店、1999年、p. 400.
- 2) 須藤洋次「校歌に見る京都の景観」『龍谷教職ジャーナル』第5号、2017年、pp. 97-110.
- 3) 古岡俊之「『学校教育センター年報』第2号（武庫川女子大学学校教育センター）」『西宮市立小学校校歌の中の山と川をめぐる環境教育の可能性—環境学習材の視点から—』、2017年3月
- 4) 田辺真人・監修 公益財団法人 宝塚市文化財団・編「豊かな自然」『宝塚まちかど学』、神戸新聞総合出版センター、2015年、pp. 106-108.
- 5) 田辺真人・監修 公益財団法人 宝塚市文化財団・編「まちを潤す川」『宝塚まちかど学』、神戸新聞総合出版センター、2015年、pp. 109-115.

（原稿受理日 2024年3月8日）